

11.5.4 インプットとアウトプットを繋ぐシャドーイング・音読

シャドーイング・音読トレーニングにより、音韻表象形成の自動性が達成できることにより、リスニング、リーディング能力が向上する。それと同時に、内的リハーサルの高速化・自動化により、スピーキング能力の向上に大いに貢献する。

11.6 音読による内在化とは?

新出単語や表現の内在化のためには、単調で平板な音読ではなく話者に成りきって感情豊かに音読をする必要がある。

11.6.1 広義の内在化

- ・ ヴィゴツキーの考え
- ・ トマセロの考え

筆者は特にトマセロの言及する「模倣能力」と「同調能力」が音読やシャドーイングの時にも要求されると述べている。

11.6.2 英語教育において内在化を捉える 3つの視点

3つの視点：

言語(language あるいは speech)・身体性 (embodiment)・情動 (emotion)

11.6.3 言語・身体・情動が共振する音読

言語・身体性・情動が共振するテキストを音読することにより良質のインプットを得ることができる。(例：pp.361~363)

11.6.4 まとめ

音読について考える際には、身体や情動を視野に入れることが必要である。音読による内在化は「言語・身体性・情動」という単位によってとられる。

11.7 音声知覚の能動性：運動理論をめぐって

本節では「運動理論」・「ミラーニューロンの研究成果」について説明する。

またシャドーイングによる外的リハーサル能力の高速化・効率化がリスニング力・スピー

キング力の獲得、更に新規学習事項の内在化のために不可欠であるという考え方について検討する。

11.7.1 Liberman による音声知覚の運動理論

Liberman による音声知覚の運動理論：聞き手が /l/ , /r/ などの特定の音声の知覚ができるためには (lead, read の区別など)、その音声を聞き手自身が調音できないとだめだという考え。

11.7.2 音声知覚の運動理論再興：リスニングにおける運動前野の活動

Wilson, Saygin, Sereno & Iacoboni による

“Listening to speech activates motor areas involved in speech production”
という論文で上記の Liberman らの学説を立証しようとした。(pp.365~367)

11.7.3 行為の理解には行為の再現能力が必要か

一般的には行為の「理解」にはその行為の「再現」が必要であるということを示唆する研究が近年では多い。

ミラーニューロンの効果：

他者の行為を自身の行為として模倣することで、その行為がよりよく理解される。

11.7.4 シャドーイングによる調音トレーニングは、リスニング・スピーキングや新情報の獲得といかにつながるか

シャドーイングによる復唱、いわば声に出して行う「外的リハーサル」を何度も行うことで、スピーキングに先立って心の中で準備する「内的リハーサル」が効率よく行われ、スピーキング力が向上すると考えられている。

11.8 スピーキングの心的プロセス

本節では英語母語話者が英語の文をいかにして産出するかについて言及する。

11.8.1 言語産出過程の概略

Fromkin & Ratner が発話産出の諸段階について考察した。(p.372 図 24)

これらの研究をもとに、Levelt(1989, 1993)による言語産出モデル(語彙仮説モデル)

が提唱される。

11.8.2 第二言語における言語産出過程の特質

Kormos(2006:168)は上記の Levelt のモデルをもとに、第二言語における文産出モデルを提案している。(pp.372~373)

11.8.3 第二言語における流暢な文産出を容易にする要因

門田(2009a)は第二言語におけるスピーキング(文産出)を実行する仕組みを提唱している。(pp.373~375)

この仕組みが今まで本書が述べてきた方法論に使用されている。

11.9 教師のモデルを提示することはなぜ意味があるのか?

11.9.1 明示的説明なしに子どもは物語を理解するのか

山本(2009)は以下の3点が実現することが読み聞かせの利点であると考察し、それを満たすような題材を適切な方法で読み聞かせることは、学習者の意味処理及び記憶保持に対する効果につながるとした。(pp.366~377)

- ①意味への意識を引く
- ②身体感覚を刺激する
- ③情動を動かす

11.9.2 身体を通じた意味づけと情動

音読は様々な表現を身体に取り込むための有効な方法である。

また内容に感情移入し、情感を込め自己表現の手段として音読するオーラル・インタープリテーションは自らの情動を動かすと同時に、様々な表現とそれに付随する意味を身体感覚の中に刻印する手段であると言える。

11.9.3 子どもの模倣と synchronicity における大人の役割

第二言語学習は指導の時間が限られているため聞き手が身体反応を示す良質なモデルを提示する余裕がなくなる傾向にある。しかし、そのような制限があるからこそ、同期性(教師の行動に生徒が身体反応を示す)を意識した教師のモデル提示が重要となる。

生徒が話し手を理解したいと思える内容のある Oral Interaction や Oral introduction、そ

してスピーチやストーリー・テリングが有効である。

11.9.4 他者と自分を身体でつなぐミラーニューロン

ミラーニューロン：自分の行動と他人の行動をあたかも鏡にうつしたかのように反映して、活動する神経細胞。あるモデルを見た時に模倣という反応を起こすのもミラーニューロンの働きである。

11.9.5 教師の役割と教師によるオーラル・インタープリテーションの意義

学習者の年齢に関係なく、心身の反応を呼び起こし、教師との synchronicity へつなげるという点でオーラル・インタープリテーションは効果的であると考えられる。

教師が素のまま感情や身体感覚に任せて示すモデルは、表面上の身体反応でない、情動を含む生徒の様々な感覚をも活性化させることができる。

11.10 音読・シャドーイングをベースにした第二言語習得理論の構築にむけて

本節では、第二言語習得に影響する変数をいくつか取り上げ、その上で現存の第二言語習得理論についてその概要を説明する。また音読やシャドーイングをベースにした第二言語処理や習得の研究を実施していく上で、現時点で有望な理論的枠組みである

The Associative-Cognitive CREED モデルについても説明する。

11.10.1 第二言語習得に影響する変数

- ①学習法(教授法)
- ②学習環境
- ③母語と第二言語間の言語上の距離

11.10.2 第二言語習得理論の現状

投野(2007, 2008)は VanPatten & Williams (2007)の分類に従い、現在の主要な第二言語習得理論として9つあると述べている。(pp.384~385)

11.10.3 今後の理論的展望

The Associative-Cognitive CREED モデル：

言語学習を

①行動主義的な連合学習(オペラント条件付けと古典的条件付けに基づいた刺激・反応・強化という行動主義心理学の理論的枠組み)と

②GREED(構文ベース・合理性・実例駆動・総合的な創発性・論理性)

によって説明できるというもの。(pp.385~386)

筆者はこれまでの SLA(second language acquisition)は言語習得の前提となる学習対象言語の処理という観点が入っていないと考え、これを踏まえた研究を SPLA(second language processing acquisition)と呼ぶ必要があると考えている。

授業全体に関する感想・考察

今回私は、2つのことについて述べたいと思う。

一つ目は第3章「各種音読指導法」の p.76 に書かれている音読する際に気をつける部分を記号で示す指導法についてである。

私が中学生・高校生の時にはこのような記号が書かれた教材はほとんど使用されていなかった。また教師からも指導する際に文の読み方についてはほとんど指導されず、あったとしても、語尾の上がり下がりについてくらいであった。

現在の教科書には発音の強弱についての記号が記載されているため教師にはこれらを有効に活用してほしいと思う。単調な平板読みではなく、英語らしい音読の仕方を中学生のうちから身につけさせる必要があると考える。

]

二つ目は単語を指導する際、意味だけでなく発音までしっかりと教える必要があるということである。

実際に私が塾講師として生徒に教えている時にこのことを思う。生徒は単語の意味を覚える際にスペルと意味だけを覚えようとしており、発音は覚えようとししない。

しかし、これは漢字を覚える時に書き方と漢字の意味だけを覚えることと相違ないと思う。読み方を知らなければ音読をすることができず、結果的にスピーキング・リスニング能力の向上は見られないのではないかと思う。

学校でも発音指導の有用性をしっかりと指導し、また過程学習においても自分で発音練習をできるような指導法を考案してほしいと考える。